

【大江健三郎氏から寄託された資料の紹介】

* 資料写真については、本件の報道以外の目的での無断利用はご遠慮ください。

* 報道でご使用される場合は下記のクレジットをお入れください。

写真提供：東京大学文学部・大学院人文社会系研究科

<資料 1> 「死者の奢り」 (1957)

「死者の奢り」(1957 年)の自筆原稿。大江氏が本学文学部在学中に執筆した短篇。初出は「文学界」1957 年(第 11 巻)8 号。最終稿では「死者たちは」と始まる鮮烈な冒頭部分は、この原稿では「彼らは」という表現が使われている。

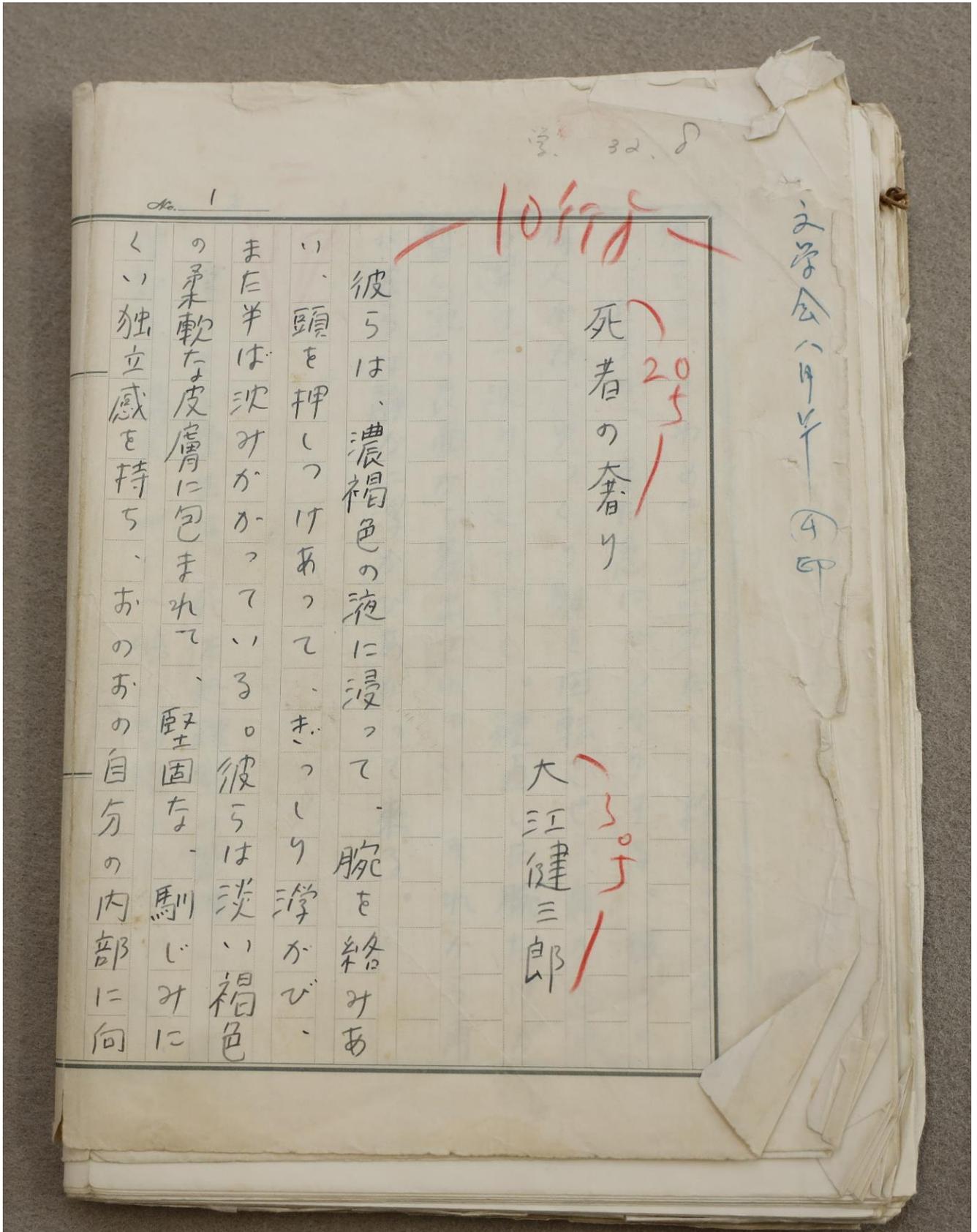
<資料 2> 『同時代ゲーム』 (1979)

『同時代ゲーム』(新潮社、1979 年)の自筆原稿。1976 年に客員教授として滞在したメキシコ体験を経て執筆され、様々な議論を呼んだ長篇小説。「第一の手紙」の最終稿のタイトルは「メキシコから、時のはじまりにむかって」であるが、ここでは「メキシコから、時の始まりをめぐって」となっている。

<資料 3> 『燃えあがる緑の木 第一部』 (1993)

『燃えあがる緑の木 第一部 「救い主」が殴られるまで』(新潮社、1993 年)の自筆原稿。1993 年から 1995 年にかけて発表された三部作の第一部をなす。「あの人をギー兄さんと呼んで」という一節から始まる冒頭箇所に加筆・削除が次々と施されている様子がわかる。なお、最終稿は、『『屋敷』のお祖母ちゃんが、あの人をギー兄さんという懐かしい名前で呼び始められた」という一節から始まっている。

<資料1—①>



32. 8

No. 1

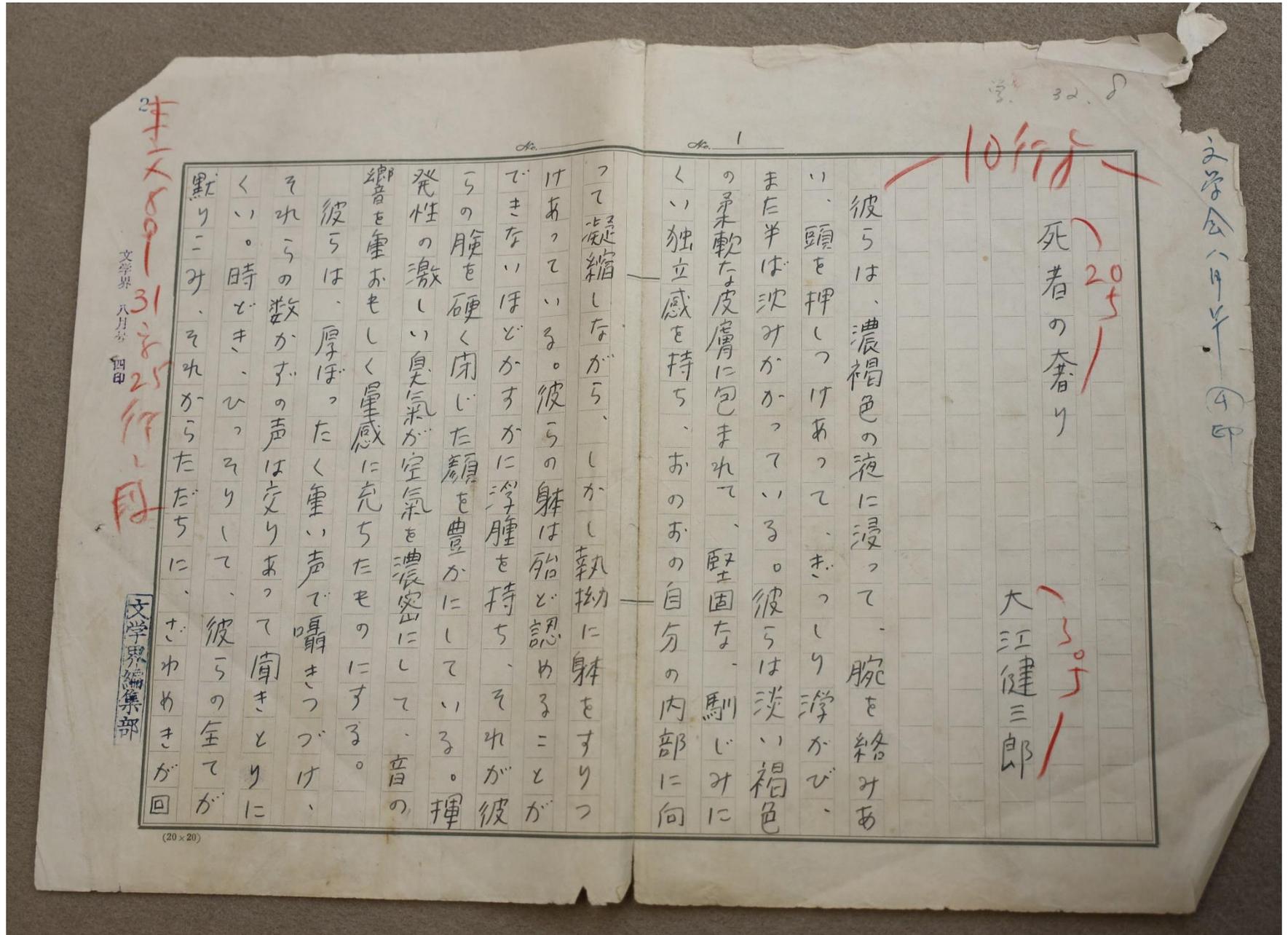
10行

文学会ハリヤ
④印

死者の奢り 205

大江健三郎 305

彼らは、濃褐色の夜に浸って、腕を絡みあ
 い、頭を押しつけあって、おっしり浮かび、
 また半は沈みかかっている。彼らは淡い褐色
 の柔らかな皮膚に包まれて、堅固な、馴じみに
 くい独立感を持ち、おのおの自分の内部に向



32

10行

死者の奢り 205

大江健三郎 305

文学会八月号 4印

文学界 八月号 四印

文学界編集部

(20x20)

彼らは、濃褐色の液に浸って、腕を絡みあ
い、頭を押しつけあって、きつしり浮かび、
また半は沈みかかっている。彼らは淡い褐色
の柔軟な皮膚に包まれて、堅固な、馴じみに
くい、独立感を持ち、おのおの自分の内部に向

って凝縮しながら、しかし執拗に身をすりつ
けあっている。彼らの身は殆ど認めるところが
できなほどこかすかに浮腫を持ち、それが彼
らの腕を硬く閉じた顔も豊かにしている。揮
発性の激しい臭気が空気を濃密にして、音の
響きを重くもしく曇感に充ちたものにする。
彼らは、厚ぼったく重い声で囁きつづけ、
それらの数がずの声は交りあって、痛きとりに
くい。時どき、ひっそりして、彼らの全てが
黙りこみ、それからたまたに、たかやめきが回



<資料3—②>

